



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円

道標



神の恵みを実感する

福者レオ七右衛門殉教祭

十一月十五日(日)午後、川内教会で「福者レオ七右衛門殉教祭」が盛大に開催された。

これは長年にわたり、平佐(川内)で信仰を棄てなかつたために斬首刑に処せられた(一六〇八年)薩摩の殉教者・レオ税所七右衛門の遺業を称え、彼の列福を祈ってきた「川内殉教祭」が、昨年十一月の列福の実現により、名称を変え



川内教会で講演する古巢馨神父

「レオ七右衛門の殉教という英雄的行為だけに目を奪われてはいけません。彼に下った神の恵みが鹿兒島教区にとつて本当の恵みとなるためには、私たちがどのような生活をし、どのような生き方であるか、恵みにこたへたいのか、追求したいのか、と訴え、レオ七右衛門

て祝うことにしたものの。この殉教祭はこれまでと同様に、殉教者について学ぶ講演と殉教者の遺業を称えるミサ、それにレオ税所七右衛門が受洗した京泊教会の跡地への巡礼で行われた。講演は、午後一時から「恵みが恵みとなるために」日本のガリラヤから」のテーマで行われた。講師は古巢馨神父(長崎教区)。講師は「レオ七右

新風

サンタクロースの元祖は聖ニコラオ司教(十二月六日祝日)で四世紀前半の人です。彼は現在のトルコ南西部の町・ミユラで裕福な家に育ちました。ある日三人の娘のいる貧しい家族の事情を知ります。その家のお父さんは生活費を稼ぐために娘たちの身売りを考えていま

現代のサンタクロースは誰?

した。それを知らなかったニコラオは大金を与えて娘たちを嫁がせたいという心です。貧しい人を助けるニコラオの聖徳が人々に知れ渡り、のちに司教に推挙されたそうです。司教になってからも貧しい人々への援助や聖徳は輝き、あらゆる職業の人々に恵みをもたらしたので一般の人々に最も人気のある聖人になりました。子供たちのためにトナカイに乗っ

てプレゼントを配るサンタクロースのイメージはオランダで生まれ、後にアメリカに移住しニューヨークをつくったオランダ人がアメリカ中に今のスタイルを定着させたそうです。ちなみにサンタクロースの赤い服は司教のスタータンの色です。前教皇ヨハネ・パウロ二世は回想録の中で、サンタクロースは子供たち

除こうとして、子供たちにサンタクロースの代わりに「氷じいさん」と呼ぶように指導していたそうです。一方、資本主義経済の西欧諸国ではサンタクロースのイメージは今や商業主義の片棒をになう存在になってしまっています。前教皇は指摘しています。いずれにしてもサンタクロースから愛の実践という宗教的意味が薄れていくのは否めない事実です。そこで、前教皇は現代のサンタクロースは一体誰であるかと考えたとき、それはマザー・テレサであると答えています。物心両面にわたる貧しい人や死に行く人、また乳児の世話など命の尊厳に奉仕する姿勢こそ、千七百年前、聖ニコラオ司教が行っていた愛のわざと彼の聖徳に相当するのだというのです。(H・N)

の小さな出来事の中でも、自分の安楽な生き方を壊そうとチャレンジしていくことで殉教者の精神を生きたことができる。私たちも殉

台風被害の花蓮教区へ 教区から緊急援助金送付

八月上旬、台湾を襲った台風八号の甚大な被害に対する緊急援助の要請に対し、教区本部は十一月五日(木)に台湾のカトリック花蓮教区曾健次補佐司教宛てに

六十四万三千三百二十九円を送付した。これらの募金は教区内の十七小教区と一つの宣教会から寄せられたもの。なお二小教区と一修道会と個人から寄せられた分

教者に倣って挑戦して「こ」と参列した信者たちを励ました。会場となった川内教会の聖堂はほぼ満席で、二百五十人ほどの信者が教区内外から参加した。ミサ後、希望者は京泊にある教会跡を巡礼し、橋口啓悟神父(川内教会主任)の先唱で聖歌とロザリオを一連をささげ、初めての「福者レオ七右衛門殉教祭」を終えた。

札幌教区管理者に 菊池功新瀉司教

教皇ベネディクト十六世は、十一月十七日(火)、札幌教区のペトロ地主敏夫司教(七十九歳)から提出されていた教区司教定年規定(教会法四〇一条)による辞任願いを受理し、新瀉教区のタルチシオ菊池司教(五十一歳)を新瀉教区兼任のまま札幌教区管理者に任命する旨を発表した。

YET

プロジェクトリア 症候群、この病について知ったとき、人間の生命の不可思議さを思い知らされた。新生児期から幼年期に発症するこの病、通常の十倍の速度で老化が進むという。この病に侵されたのがカナダのアルバータ州に住んでいたアシュリー・ヘギさん。初めてテレビを通して彼女の姿を見たとき、ETにも似たその風貌にショックを受けた。でも難病に侵され老婆のようになりながらも「人生は不満を言うほど悪いものじゃない」と笑顔でその生をまっとうした。こちらはいえ、一応五体満足。見た目には精神もそこそここのよう。普通だ」と思い込んでいた自分が欲深い。生活上の快適さを求め冷蔵庫に車、エアコン...と欲しいものだらけ。そして何と言っても老後のために子供のための教育のためにこれだけは譲れないと「お金」とくる。もちろんそう考える一方、そんなものは人間にとつてたいして必要ない。叫んだりもする。貧しくなければ感謝の心は生まれないなど無理して言ってみる。キリストは何一つ所有してなかったではないか。と言いつつ聞かせたりもする。でも心からではない、無理やり頭に分からせようとしているだけ。の弁明に過ぎない。このままではまずいと思う。だからヘギさんのように崇高な生き方で「人生はそんなに悪いものではない」とまでは言えないにせよ、明石家さんまさんが大竹しのぶさんとの間にもうけた子供に「生きてるだけでまるもうけ」と「いまる」と命名したくらいかと思う。

北陸地区宣教奉仕者(信徒使徒職)養成講座

教区の終身助祭制度と宣教奉仕者

溝辺教会主任司祭 永山幸弘

I 鹿兒島教区における終身助祭制度と宣教奉仕者

二〇〇五年九月、前教区長糸永真一司教は一教区昇格五十周年にあたって「終身助祭制度の導入」と「信徒奉仕者(宣教奉仕者)と祭壇奉仕者」の養成」を正式に開始しました。その時の「五十周年文書」(カトリック教区報二〇〇五年九月号に掲載)によれば、両制度の導入はこれまでの五十年の教区の歩みが現在停滞している現実を直視し、次の五十周年を希望の歩みとするための根本的な方向転換を意図しています。この制度は司祭と正式に職務を委託された信徒が協働して特に信仰共同体を作ることに重点を置くという新しい発想です。これによって小教区を活性化し、教区が一体化することを目指しています。

II 宣教奉仕者という呼び名と職務内容

鹿兒島教区では教皇様から出された自発教令『ミニステリア・クエダム』(一九七二年八月十五日発布、一九七三年一月一日発効)と新教会法第二三〇条第三項(合わせて三五八条、三五九条、三六〇条)によって男女の性を問わず、一定の期間を決めて任命されるものです。鹿兒島教区における『宣教奉仕者』の職務内容は『朗読奉仕者』ならびに『祭壇奉仕者』とまったく同じです。専任と

して奉仕する方、必要な時、教会宣教活動の一端を担う方等、働き方の多様性も考えています。

①宣教奉仕者は典礼集会で神のことは朗読します。また司祭不在時に典礼法規に従ってみことばの祭儀を司式(祭壇奉仕者)し、聖体を拝領させること(聖体奉仕者)も可能です。これらは子どもと大人に要理教育を行うこと、秘跡の準備をすること、求道者を洗礼に導くなどの広がりを持つ役割です。なぜなら教会の宣教活動は特に聖体の秘跡に向かっていくからです。

②教会の基礎は聖書と聖伝そして教導職です(啓示憲章一〇章参考)。従って教会の教えを学び、深め、味わう信徒が増えていくことが教会の健全な発展の土台となります。その一端を担うのが宣教奉仕者です。信仰はその内容の理解を前提とし、それは愛を生み、自分を全面的に神に奉獻することに向かいます。

③鹿兒島における教会の現状は糸永司教の「五十周年文書」の中で、「世俗化が進み、個人主義が広がり、価値観が多様化する現代においては奉仕者の数と質は重要になりました」としています。主日のミサ参加率の低下、青少年の教会離れ、司祭召命の減少を克服する有効な方法は教を自分のものにし、聖霊に支えられてそれを実際に生きることが求められています。

④宣教奉仕者の役割は司祭の肩代わりをすることでなく、むしろ司祭の手の届かない分野で、信徒独自の視点から日常的な教えを、分かち合いながら共同体の隅々にまで信仰の理解が浸透していくための奉仕です。

⑤「五十周年文書」において、宣教奉仕者を希望する方々以外にも各活動団体の指導的立場の方々にもこの任命がされるのが望まれています。

III 宣教奉仕者の霊性

ここで「霊性」という言葉を用いた生活の方向付け、あるいは心構えという意味で使用したいと思えます。任務を遂行するとき人間全体を表現することになり、その人の表面的なものではなく、生き方の方向性と在り方が問われるからです。

①みことばへの奉獻：みことばを受け入れる人は全生活をみことばにゆだねます。日々みことばを黙想し、味わうことによつてキリストへの愛が深まり、それを伝えずにはいられなくなり

IV 宣教奉仕者と祭壇奉仕者が向かっているもの。両奉仕職の目指しているものは神の民に奉仕すると同時に、キリスト者としてキリストに一致して生きることです。これはキリスト者の目標でもあります。キリストが大切にされた神と人への愛をみことばを通して

て黙想し、深め、生き、証しするためです。宣教奉仕者は教会の中で司祭の高齢化による聖体授与が困難な時、聖体を授与し、不在の時、司祭不在の集会司式を司式し、病人が多数である時は司祭が回りきれない病人に聖体を授ける、ミサの参加者が多く一人の司祭が聖体を授与するために時間がかかり過ぎる時、ともに聖体を授与するなどその時その時の教会の必要に奉仕していきます。

次回(二〇一〇年一月十七日(日)十四時から、朗読の仕方について)と「教会の教えについて」のカテゴリーが川内教会で行われます。

催し物のお知らせ

- チャリティー市民クリスマス 12月6日(日) 14時 川内市民文化ホール 入場料 前売券大人1,000円(当日1,200円) / 子供500円(当日600円)
●クリスマスコンサート「ハーブに詩う」 12月12日(土) 14時 ザビエル教会 入場料 1,000円
●市民クリスマス 12月13日(日) 14時 ザビエル教会 入場料 前売券1,000円(当日1,300円) ※中学生以下無料
●ホルスティック療法による「癒しと祈りの集い」 12月14日(月) 10時~12時 ザビエル教会ホール 坂本進神父 受講料500円
●鹿兒島ハイドン協会オーケストラ・合唱団「第5回演奏会」 12月26日(土) 15時 ザビエル教会 入場料 1,000円

[和善の窓から] その② 帰根



和善の学びは、まず「根に帰る」学びです。『老子』にある「根に帰るを静と日ふ」というフレーズに由来する言葉です。根が立派でなければ木は育ちません。根があって、幹があり、枝があり、葉が茂るわけです。根がしっかりしていなければ、それは早晩、葉枯れ、枝枯れになります。樹木はその枝ぶり、葉ぶりの立派さが称えられますが、それは根があつてのことです。そして、根はたった「1つ」です。そこからすべてが栄えていくのです。幹、枝、葉、実は、根が供給する「力」の表れなのです。ですから根そのものの持つ潜在能力を高める学びこそ、「帰根の学び」であり、和善の学びの目指すところ。このような学びの特徴は、「反復」です。

退屈することのない反復のなかに種々の「気づき」がそれぞれの人に起きるのです。これは、アジア司教協議会連盟の「アジアの学び」の根本姿勢でもあります。最近、いろいろなところから「なんやかんや言っても、やはり聖書ですね」という声を聞きます。この場合「聖書」といえば、おそらく、「聖書全巻を読む」ことです。約3,000人を超す信徒・聖職者の「聖書通読マラソン」(和善耕心塾の取組み)も、和善の学びにおける「根」になります。根から幹、枝、葉、果という「ダイナミック」な「動」は、常に「静」である「帰根」の姿勢に準拠するのです。躍動的で、しかも「静」を備えた霊性を追求したいものです。
ファシリテータ Fr. 松田清四朗
和善耕心塾講座案内:月曜日 18:30(救済史) / 水曜日 10:00(救済史:第2・4)・18:30(Focusing) / 金曜日 10:00(救済史)
本部3階 後期最終講座 12月14・16・18日
http://mr826.net/wazen/blog

+KABAYAN SEKSIYON+
Tularan natin si Maria
Pagnilay-nilayan natin kung paano natin tutularan si Santa Maria sa pananampalataya. Ngayon sa bahaging ito, pagninilayan natin ang pangalawang aspeto na mayroon pagkabahala at pag-aalala, tunay na dalamhati at pagdurusa. Kagaya ng mga propeta, nagdudulot ang Salita ng Diyos ng mabuti at masamang kapalaran. Si Maria ay "pumapasan nna ng Krus" ng isang alagad ni Kristo. Pangatlo, madalas mayroon kakulangan ng pang-unawa. Si Maria at Jose, at nang lumaon "ang Labindalawa" ay hindi makaunawa sa ibig sabihin ni Jesus. Ang pananampalataya ay hindi "maliwanag na kabatiran" kundi "pagtingin nang may kalabuan, gaya ng sa salamin" (1 Cor 13:12). Bilang panghuli, mayroon ikaapat na yugto ng paghahanap kung saan hindi kinailimutan ni Maria ang pangyayari kundi "itinago ang lahat ng bagay na ito sa kanyang puso." Ang pananampalataya ay patuloy na paghahanap ng kahulugan ng saysay na nagaganap sa pamamagitan ng pagtuklas sa kawing na nag-uugnay sa mga ito. Gaya ng "eskriba na kumikilala sa paghahari ng Diyos," kumilos si Maria "tulad ng isang puno ng sambahayan na kumukuha ng mga bagay na bago at luma sa kanyang taguan". Dahil ang pananampalataya ang susi ng buong buhay ni Maria mula sa kanyang banal na pagka-ina hanggang sa kanyang "pagkatulog sa Panginoon," isang tunay na "paglalakbay sa pananampalataya" ang kanyang buhay. Ito ang dahilan kung bakit siya ang ating huwaran at tagapagtaguyod sa pananampalataya. Ngunit bukod sa ating pansariling buhay-pananampalataya, ipinakita ni Juan Pablo II ang higit na malawak na kahulugan nito. "Nais kong pagnilayan ang 'paglalakbay sa pananampalataya' kung saan nanguna ang Mahal na Birhen... Hindi lamang ito tungkol sa kasaysayan ng buhay ng Inang Birhen, ng kanyang personal na paglalakbay sa pananampalataya. Tungkol din ito sa kasaysayan ng buong-bayan ng Diyos, ng lahat ng taong kasama sa iisang 'paglalakbay sa pananampalataya'"
Papasok na tayo sa panahon ng Adbiyento at ito rin ang panahon na dapat natin paghandaan ng maiigi sa pagdating ng ating Panginoon.
"MALIGAYANG PASKO AT MANIGONG BAGONG TAON SA INYONG LAHAT!"

奄美大島にお客様!

五島列島浦頭教会から巡礼団

十一月七日(土)から十日まで、三泊四日の日程で五島列島の浦頭教会から十五人の巡礼団が奄美大島



信仰あつい浦頭教会からの巡礼団

を訪れた。五島といえは宣教四百五十年の歴史を持つ「キリシタン末裔の島」。実は今年の五月、その信仰の故郷を奄美から小限憲士地区長ほか十一人の巡礼団が訪問し交流を深めたばかりだった。

五島と比べ奄美大島の宣教の歴史はまだ約百二十年。しかし五島出身の中村長八神父(列福調査中)や五島で活躍したマルマン神父が奄美でも宣教された歴史があるほか、現在も五島出身のシスター二人が奄美で働いているなどその縁は深

司教執務室便り

司祭養成はみんなの手で

十二月最初の日曜日は「宣教地司祭育成の日」。鹿兒島教区の神学生のためばかりでなく、とくに、貧しい国で司祭を志す若者のために祈りと献金が捧げられる日。

ところで、鹿兒島教区には「司祭養成費」が維持費と同じように義務化されている。しかし、いずれも年々減少傾向にあるという。理由は分からないが、信徒数もわずかながら減少しているとするれば自然なことかもしれない。だが、「神学生がいる教会は多い」と聞けば「それはいかげなものか」。神学生が「自分の教会の出身者」であれば特別の親しみがあるが、司祭養成はみんなの関心事でなければならぬ。「いざれ私たちの教会の主任司祭」になつてくる人たちのためのからだ。ちなみにも、鹿兒島教区には二人の大

い。五島からの巡礼団一行は七日、空路奄美入りし、瀬留教会を訪問。夜は聖心カトリックセンターで地元信徒と交流し、翌日八日には、聖心教会で巡礼団同行の真浦健吾神父と小限憲士神父の共同司式ミサにあずかった。また九日には奄美から五島に巡礼した仲間数人が巡礼団に加わり、北大島六つの教会を巡った。特に、

盛大に献堂五十年を祝う

徳之島の母間教会

徳之島の母間教会(福岡英雄神父)が献堂五十周年を迎え、十一月一日(日)、郡山司教とともに感謝のミサをささげた。徳之島での宣教は、パリ外国宣教会によって一九〇一年に始められた。カプチ

中村長八神父が初代主任司祭だった大笠利教会では、信徒会館で笠利聖母保育園園児の遊戯や島唄の演奏もあつた。同保育園には五島出身のシスター二人が働いているが、その一人は同行司祭の真浦神父の姉だった。最終日、巡礼団は空港近くにある奄美パーク内の田中一村記念美術館を見学して奄美を後にした。(報告・平三國)

学生と四人の小神学生が在籍している。貴島神学生はマニラでの青少年司牧三年コースに在学中。久保神学生は来春福岡キャンパスでの神学部三年への編入を指して東京で準備中。一方、小神学校では園田神学生が南山高校の最高学年で田代、石堂、大田各後輩神学生をしつかりまとめていて頼もしい。

更に神さまは韓国からも神学生を送つてくださった。正確に言うとなら神学生志願者。韓国では洗礼名で呼び合うのでフランシスコ、ドミニコ、それにアントニオの三人。ソウルで日本語学校に通いながらインチョン大神学校入学を準備中。後援会ができて二十人余りの会員が祈りと献金で応援。これも思いがけないことで神に感謝だ。

こうしてみると来年からは鹿兒島教区の神学生は一挙に九人!嬉しい悲鳴とはこのことだ。信徒の皆さんの一層の霊的、とくに経済的支援の底上げが望まれる。



短信

▼大口教会堅信式
十月二十五日(日)大口教会で十二人が堅信の恵みに浴した。

▼有志がおはら祭に参加
十一月二日(月)のおはら祭前夜祭に「ザビエルの熱き想い」を伝えるお揃いのハッピーを身に纏った信者たち約百人のグループが電車通りをヨイヤサーと元気に踊り歩いた。
▼唐湊・草牟田墓地でミサ
十一月十四日(土)カト

待降節を有意義に過ごしましょう

ザビエル教会助任司祭 G・ティエン

待降節は神さまを待つ季節です。カテケジスで学んだように、救いの歴史の中で、神は二回世界に来ます。まずこの世に来て生まれ、そして最後の日に来て救いの歴史を完成します。この二回はとても大切なことです。ですから、私たちはいつも神さまのために準備して、その日を迎えます。待降節にあたり、皆さんと一緒に「待つ」ということについて考えてみたいと思います。

私が子どもの頃、両親はよく親戚を訪れるため、二、三日出かけることがありました。そんなとき私は両親が帰ってくるのを楽しみに待っていました。お土産のお菓子などがたくさんあつたからです。中学、高校生にもなるとお土産よりも、ただ両親が帰って来てくれることがうれしくなりました。長代理や議員も足を運ぶなど、教会が地元と温かく交流していることがうかがえる集いとなつた。

待降節は救いの歴史の頂点であるクリスマス準備するのうちに、人間を御父の栄光のうちに連れて行きます。しかし、その日、その時は、誰も、知りません。神さまはお呼びになります。力強くお呼びに

なりますが、それに、私たちは、気がつかないことが多いです。そういう私たちに對して「回心しなさい」と呼びかけておられます。この待降節に私たちは、もう一度神さまのもとに立ち返ります。黙想をして、ゆるしの秘跡を受けて、祈りと犠牲をささげ、ミサによく参加して、心をよく整えて、イエスさまを迎えましょう。

連合壮年会主催 黙想会
あなたの歴史の中でキリストと出会う
 日時: 12月28日(月)9時~17時
 場所: 教区本部二階
 指導: 山根克則神父(洗足教会)
 参加費: 1500円(弁当代含) ※申込は各小教区壮年会会長へ。どなたでも参加可

12月の会と催し

- 3日(木) 聖フランシスコ・ザビエル司祭
- 7日(月) 小川靖忠神父叙階記念日(一九七二年)
- 8日(火) 無原罪の聖マリア
- 13日(日) 待降節第三主日
- 19日(土) 有馬信茂神父命日(二〇〇七年)
- 20日(日) 待降節第四主日
- 23日(水) 大野和夫神父叙階記念日(一九六一年)
- 25日(金) 主の降誕
- 26日(土) 聖ステファノ殉教者
- 27日(日) 聖家族
- 28日(月) 幼子殉教者



リック唐湊墓地で久しぶりの死者のためのミサがささげられ、百人余りの信徒が参列した。また二十一日(土)には、壮年たちの働きで見事に生まれ変わった草牟田のカトリック墓地跡でもミサがささげられた。郡山司教は、祭壇が設けられ記念碑のように立派に生まれ変わった跡地を見て、「壮年をはじめめとする皆さんの労力と熱意のおかげ」と感謝の言葉を述べた。

司祭年に思う

谷山教会協力司祭

W・フリチエル



去る二〇〇九年六月十九日(金)イエスのみ心の祭日(この日は慣例に従い、司祭の聖化のためにささげられている)に、教皇ベネディクト十六世は「司祭年」を開始され、二〇一〇年のイエスのみ心の祭日に終了するとされました。これは、全司祭が、心の刷新への努力を深め、現代世界にあつて力強く、はつきりと福音を証しすることができるようになるためとされています。このためには、もちろん司祭本人の努力も必要ですが、家族、小教区共同体、聖職者の共同体の愛、協力、努力、犠牲が必要です。ところで四十年前、カナダで一人のちよつと有名な

なつた九十歳のお母さんが亡くなりました。有名になつたというのには次のようなことからです。このお母さんは十人の子供を産み育てました。子供たちの一人は司教であり、一人は教区長であり、五人は司祭たちであり、一人は修道士でありました。そしてその二番目の子供が鹿兒島のエジト・ロア教区長でありました。このお母さんは子供を皆、神さまにおささげいたしました。彼女は天の国の仕事をすることがせつに必要であるというのをはつきりと承知しておりましたので、このような犠牲を払つたわけです。さて、昔の人は「司祭の聖職を超える高尚な美しい職はほかにありません」と言つておりましたが、やはりこの世で一番比べられるものはない聖なる務めでもあります。なぜならば、この聖職に入るあるいは就

みことばシリーズ⑦

みことばを食べ、生かされる

教区助祭 四條 淳也

「同じ釜の飯を食う」という表現がある。一つの釜でご飯を炊き、一緒に食事をする事によって、お互いの仲が良くなり、親しさが増すということだろう。一緒に食事をするとどういふことは、何かお互いに、言葉ではない一致するものがある。また、鍋を囲んでお酒が入ると本音で話すことができ、さらに親しさが増す。特に適量のお酒は人間関係の潤滑油にもなる。このように食事は人間にとつては

単に命を維持するためだけではなく、人間関係を良くする大切なものである。家庭での食事は特に大切である。昔の子どもは食事の時間に囲炉裏を囲んで父親や母親、またはおじいちゃん、おばあちゃんから昔話や教訓を聞いて育つた。最近では家族が一緒に食事をすることが少なくなつており、子どもが一人で食べている家庭もある。これからはできるだけ時間を作つて、家族揃つて食事をすると

習慣を付けたいものだ。このように大切な食事にたどえて、旧約聖書は「言葉を食べる」という表現をしていて、神の言葉をよく聞き、噛み砕いて味わえば「あなたの仰せを味わえ、わたしの口に蜜よりも甘いこととしよう」(詩編119:103)となる。これは、主の言葉が甘いことをたとえて話している。また同じ様に「あなたの御言葉が見いだされたとき、わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしの喜びとなり、わたしの心は喜び躍りました。万軍の神、主よ。わたしはあなたの御名を

もつて、呼ばれている者です」(エレミア15:16)と心も歓喜に満ちるのである。新約聖書には、イエスが皆と食事をすると場面が多く出てくる。カナでの婚礼(ヨハネ二章1-12)ではぶどう酒が足りなくなり、マリヤの求めに応じて、イエスが水をぶどう酒に変えた話が載っている。ベタニアでは重い皮膚病の人と一緒に食事をしている(マルコ一四章3-9)。また徴税人ザアカイとの食事(ルカ一九章1-10)など、当時罪人とされていた人々と親しく食事をしていた場面が描かれている。

食事の場面では、レオナルド・ダヴィンチの絵にもある「最後の晩餐」が一番有名であろう。ここでは、イエスがパンとぶどう酒を自分の体とし、記念として行えと教え、それが使徒の時代から今日まで二千年近くも毎日捧げられているミサの原型なのである。イエスのみことばを食べるとは、イエスの血を飲み、肉を食べ、イエスと人格的に一致し、その大きなイエスの見返りを求めない無償の愛によって、小さな私たちが生かされているのである。



くのは自発的な選りではなく、神に選ばれた者だからです。このような関係で、司祭は神のこの世における代表者となり、救いを与えるものでもあります。この務めは愛の務めであり、その務めはそうしますと司祭の使命は、人々に精神的な世話をすることはもちろんのこと、肉体的、物質的世話もしなければなりません。イエス・キリストのように

愛の事業をもちたらずことです。司祭は敵でも愛し、人を祝福し、その罪をゆるし、人の死にまでも付き添つていくのです。司祭の使命はまじめな努力を要するものです。司祭は悩んでいる人に寄り添い、キリストの如く柔和であつて、悲しみにつけ、喜びにつけ、気分をむらなく、キリストのように大いなる叫びと涙をもつて、自分を死から救われた人々のためにささげ、お母さんが子供のために苦勞するように、司祭も信者のために苦勞しなければなりません。

「雌鳥が雛を翼の下に集めるように」司祭は人々を集め、罪に陥らないように注意するのです。司祭は、人の将来を心配することのほかに他の何もありません。司祭は全人類の恩人であり、平和を祈る人々に新しい生命を与え、永遠のふるさとの扉を開けるのです。このように見ますと、司祭はきれいな素晴らしい職ではないでしょうか。司



おてつないで!

9月27日にザビエル教会から伊集院一宇治城までの徒歩巡礼で一コマ。年配のチャレンジャーと手をつなぎ、励ましながら歩くティエン神父。まるで親子のようでした。(写真提供・古木慶子さん)

文芸
短歌
純心学園 山頭 信子
故郷の栗皮むきて祝い膳
ロザリオ月重き病いのシスター逝く
鹿兒島 春山マリ子
秋風に全部預けて生きて居る
夢見るはコスモス畑青い空
純心学園 川上 和
キャンパスのさくら紅葉ひらり舞う
庭に咲く秋バラ一輪御母笑み
鹿兒島 徳永ノブ子
秋天に平和の鐘の響く街
遠き日のはらから偲ぶ死者の月

俳句
大口 森 博伸
在りし日の君のまなざし偲ばむと訪ねし
君の遺児のほほえみ
鹿兒島 前田 儀子
歳晩の母の姿をおもひ来し墓のうらら陽
にせきれい遊ぶ
ゆふ茜張りたる空に金いろにやがてかが
やきはじむる三日月
鹿兒島 春山マリ子
罪の子と呼ばれてるよなその思いその
まま生きよう今日も明日も
純心学園 川上 和
「司祭年」アルスの聖者百五十年仕える業
の足跡深し

祭は人々の霊父、即ち霊的な父親であり、司祭の方へ来る人々にとっては、情け深いお母さんのようなものであり、真理を聴きたい人には教師であり、罪が取り憑いている人、即ち霊的病人にとつては医者であり、また父親、母親、教師、医者と言いますのは、人間として一番必要な、尚、またきれいな素晴らしい務めではないでしょうか。

そしてこれらの務めを全部併せ持った者が司祭であり、司祭職において一つに優れた聖務になります。だから神の代理者である司祭を聖として取り扱わなければならないし、尊敬しなければなりません。しかしながら、確かに司祭と聖務を尊敬すればするほど、司祭と心を合わせてミサ聖祭に参加しなければなりません。ミサ聖祭というものは、

司祭の指示ではなく、ミサ聖祭は人々にとつて憧れ、信者の一番独特な行為であり、恵みであります。そして、司祭は信徒とともに一つの祭司の民をつくるのであります。最後に、神が御独り子をささげられたように、人間として親もその子供を社会指導のために教会にささげなければなりません。確かに聖務を尊敬すればするほど、自分の子供を聖務に喜んで入るよう勧めます。その聖務によって信徒の中に置かれているのは、すべての人を「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れたものと思ふ」愛の一致に導くためです。そして一番大切なことは、司祭が、司教との一致、司祭同士の間、信徒との一致を証しすることができるよう司祭のために祈ることです。(レズンブール修道会)